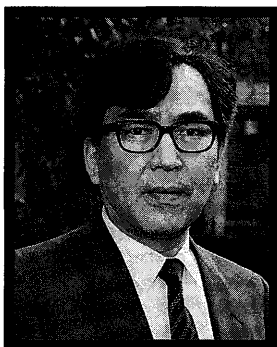


NO. 31
October '01

Newsletter

神戸女学院大学・
女性学
インスティテュート

頼藤和寛先生のご逝去を悼む



頼藤先生は本学人間科学部では、精神医学、卒業論文指導を担当され、大学院では健康科学特論、修士論文の指導をされていた。ご研究は「交流分析」をよくされ、きめこまかな対人関係の検討をされていた。ご性格も繊細で、切ってばかりの外科医よりも精神科医の方が性に合っていると、ユーモアを交えて話されたことを昨日のことに思い出される。院生はケースカンファランスでやんわりとした語調の中に鋭い批評や示唆を受けた。頼藤ゼミは常に満杯で、私は今回その6名の“忘れ形見”を引き取った。頼藤先生、天国から彼女らをお守り下さい。

頼藤先生は本学にご就任1年後に、当インスティテュート所員としてご参加下さった。以来、論文寄稿、原稿執筆等を積極的にこなして下さり、編集委員としてもご活躍下さった。もはや我々にとってはなくてはならない人であったのに、永遠のお別れとなり、一同無念さに打ち沈んでいる。せめて先生を偲ぶ特集号を組み、心より先生のご冥福をお祈りしたい。

(女性学インスティテュートディレクター、丸島令子)

頼藤和寛先生ご略歴

1947年、大阪府生まれ。1972年、大阪大学医学部卒業。麻酔科・外科を経て精神医学を専攻。1979年、大阪大学医学部精神医学教室に勤務。1986年、大阪府中央児童相談所（現：中央子ども家庭センター）主幹。1997年より神戸女学院大学人間科学部教授。

2001年4月8日、ご逝去。享年53歳。

<主著>『人間関係ゲーム』（創元社）、『「自分」取扱

説明書』『いい男、見つけた!』（金子書房）、『いま「危ない家族」の問題 Q&A』（講談社）、『わたし、ガンです ある精神科医の耐病記』（文藝春秋）、他多数。

ご家族に囲まれて

生野 照子

「自分の人生に自分で決着をつけた人を、目の前にみました」と、奥様はおっしゃった。甲間に伺った書物や事務類があふれる部屋で、頼藤先生は額縁の中から穏やかに微笑んでいらっしゃる。涙声であっても、きりっと背筋を正した奥様は、「夫のことを本当に誇りに思います」と話してくださった。

余命少ないと知ったときから、先生は死への準備を始められた。遺書を書き、お葬式のことを決め、臨死の手当てについてもお決めになった。余計な延命治療はいらぬことや、使う薬の種類、最後に必要になるかもしれない救急車ででの処置にいたるまでを示し、あとは奥様が出す死亡通知に月日を入れるだけになっていた。「旅行にでも行きましょうか」と奥様が聞くと、「いや平生の生活を続けたい」とおっしゃり、「願わくは自分の好きなようにさせて欲しい」とおっしゃったとのこと。いっさい愚痴をこぼさず、いっさい苦痛を訴えず、身辺のことは自分でなさり、床に伏せてからの下の世話も必要なかった。最期の日、立てなくなって「救急車をよびましょうか」と聞くと「しかたないなあ」と答え、電話をして救急車が到着した時には息をお引き取りになっていたとのこと。最期までご自分の意志を全うし、自宅から旅立たれたのだった。

「私や子どもに、人間のありかたを一部始終見せてくれました。言い尽くせぬほど多くを学びました」とおっしゃる奥様のお顔は、この上ない伴侶を失ったという悲しみだけではなかった。先生の人生の本質的な輝きは、悲しみを超越し、多くの人々に偉大な人間賛歌として伝わっていくであろう。お聞きしたことを学生に話しても良いという許可をいただき、私は先生の遺影を後にした。

別れを別れでなくした先生と、奥様の無二の絆。ご家族の深い結びつき。先生やご家族はきっと、時間というものを征服し、生死のまことの意味を悟られたのに違いない。

先生から教えられた“人間の信頼と誇り”を脳裏に刻み、若い人たちに伝えていきたいと思う。

(人間科学部教授：心身医学)

追悼 頼藤和寛先生

川合 真一郎

先生とは正味3年のお付き合いでしかなかったし、専門分野も離れており、研究面での会話を交わすことはほとんどなかった。それなのに学内、とくに理学館事務室周辺で顔を合やすごとに数語交わしたことが、先生の独特の笑顔と共に懐かしい。2000年5月、入院される数日前には、痔の手術と同時に直腸も診てもらうのだと仰っていた。造影剤を注入して検査することについてのいい回しがまた揮っている。「子供のころカエルを捕まえて麦わらでケツから息を吹き込んでお腹を膨らませましたやろ、あれをやられるんですワ」と。検査の後はそのまま自宅で待機、入院、そして手術をされ、次にお会いしたのは真夏の暑い日に病室を見舞ったときである。術後約1ヶ月ほど経過したころであった。予想以上にお元気な感じであったが、丸刈りにした頭をなぜながら、縞模様のパジャマを着てベットに腰掛け「なんだか囚人服を着ているみたいでっしゃろ」と。「入院患者になってはじめて、医者は患者の気持ちがわかったらんということがわかりました」ともおっしゃっていた。術後の抗がん剤治療についても副作用が怖いなと洩らしておられた。でも、後期の授業が始まると元気に出勤され、以前より少しやせられたかな、という感じであったが、日常的な業務は普通にこなしておられる様に見受けられた。とにかく、頼藤先生は亡くなられる2、3ヶ月前まで、私たちを目の前において決して悲観的な態度はとられず、ご自分のことをいつも高みから見物しながら講釈しておられるような口ぶりでお話された。闘病の記録を月刊雑誌や新書に克明に執筆されているのを読ませていただいたあとも同じような印象を持った。そのため、今年に入ってお会いしたときや、夕方門戸厄神の駅まで歩きながら雑談している時も先生がそんなに重い症状とは気づかずであった。人前で弱音を吐くことをされない分、先生は自己に厳しく向かい合っておられたのかもしれない。

天上から先生は大きな目で神戸女学院を見守って下さっていることであろう。

(人間科学部教授：環境科学)

頼藤先生を偲んで

徳永 弘子

4月11日、先生の突然の訃報に接し、驚きと悲しみのあまりしばらくの間茫然自失の状態となりました。3月中旬、体調を崩され再入院と伺い心配していた矢先のことでした。先生が天国に旅立たれた日は、奇しくも私の誕生日と同じ4月8日でした。昨年ガンであることを自ら公表され、手術後お元気になられホッとしていたところでしたのに…もうあの明快で歯切れのいいお話が聞けないと思うと残念でたまりません。今、時間の流れと共にあらためて先生の存在の大きさを感じています。

先生は、1997年4月人間科学部教授として就任され、同時に学内校医も兼務されました。先生のことは以前大学病院で先生と一緒に勤務した友達から、すごくいい先生だと聞いていました。黒縁のメガネとジーパン姿、初対面の会話は短い挨拶程度で物静かな方という印象でした。翌年の4月から保健診療所長に就任され、身近に接するにつれ初対面の印象とは違い、とても気さくで何でも相談することができ、保健室業務についての見直しや合理化に向けてさまざまな場面で先生からご指導やご協力をいただきました。社会の多様化に伴い学生の抱えている問題も多種多様で、近年特に不安症状・不眠・抑うつ・対人緊張などの心の悩みを持つ学生が増え、対応に悩んでいたところ精神科医である先生に診察いただけることはどれほど心強かったでしょう。包容力のある先生の人柄を慕って面談を希望する学生も増え、お忙しい時にも快く応じて下さり、メンタルヘルスの果たすべき役割が大きいことを実感しました。

1999年秋頃、先生が便通異常を訴えられ、その後徐々にやせてこられたので心配して尋ねると「食べるよ。だから食養生してんねん。まあ今くらいが僕のベスト体重やから」と。年が明けて、急激に疲労の色が濃くひと回り細くなられた姿を案じ、病院受診をお勧めすると「病院に行くといろんな病気を発見されるやろ。それがかなわんねん」とのお返事。それからも病状を案じて何度となく精密検査をお勧めするも、そのたびごとに軽く笑い顔でいらっしやるだけでした。そんなある日の午後、授業を中座され苦痛な表情で保健室に来られたことがありました。もはや立っても座ってもいられない程の状態だったのですが、私にはどうしてさしあげることもできず案じるばかりでした。5月中旬保健室に来られ、連休明けにようや

く病院受診したこと、そしてその時の様子とこれからの検査予定などをやや興奮気味に話されました。悩み抜かれた末やっとの思いで決心されたのでしょうか。今まで受診を先送りされていた日々から解放された安堵の表情をなさっていました。その後、諸検査を終え手術をするとの知らせを受けましたが、先生からはっきりとした病名は告げられなかったのです。医師として自らガンに冒された現実をレントゲン写真を見て気づかれたと後の手記で知りました。その時のお気持ちを察すると今でも胸が痛くなります。6月13日手術され、状態が落ち着かれるのを見計らってお見舞いに伺いましたが、あいにく外泊されていたので後日お手紙でお見舞い申し上げます。大学へは後期から復帰され、徐々に慣れてこられたようでしたが、白髪混じりの短い髪とおやせになった姿は、抗ガン剤の効果よりも副作用による傷ましい経緯を物語っていました。

先生の手記から、再発のリスクや残された時間について早くから覚悟を決めていらしかったことを知りました。「死」を意識することによって「生」が充実するという、つまりいつも命に限りがあるという意識を持ち、生きることの意味や人生の意義を考え続けられた先生から、人間としての尊厳を保つということを学ばせていただきました。死をタブー視するのではなく、死を通して本当に豊かな人生とはなにか、また自分が望む人生の終末はどのようなものなのかを私自身改めて考えながら生活していきたいと思えます。最後に素晴らしい先生との出会い、またご一緒に仕事させていただく中で、数えきれない程のご教示をいただきました。そして何よりも力強く支えていただいたことを感謝申し上げます。ありがとうございました。

先生の天上の平安をお祈り申し上げます。

(保健診療所看護婦)

頼藤先生のこと

内 田 樹

頼藤先生について二つの記憶が鮮明である。

ひとつは、昨年健康診断のときのこと。聴覚検査の部屋に頼藤先生がいた。先生は私のカルテに目を落としたまま、「内田先生、マトリックスはいかがでしたか？」と尋ねた。私は「マトリックス」というのは聴覚機能を示す数値か何かだと思って、ゴムの検査器を耳に当てたまま、「は？何ですか？」と尋ね返した。「いや、まだ映画評が出てないでしょ」と先生は笑っ

た。頼藤先生は私がホームページに書き散らしていた映画批評をとまどきご覧になっていたのである。

私はさっそく『マトリックス』を見に行き、精神分析に引き寄せた映画評を書いた。それが私が頼藤先生にあてて書いた最初で最後のテキストになった。

もう一つ覚えているのは、今年の新学期早々に配布された女性学インスティテュートのニューズレターに先生が書いた「わがうちなるセクシズム」という一文である。その短いエッセイの中で、頼藤先生はフェミニストにすりよる男たちを「曲学阿世」というずいぶん大時代的な形容詞で罵倒していた。

うちの大学の男性教員で「アンチ・フェミニズム」を公言しているのは私だけだと思っていたら頼藤先生も同類だったわけである。今度会ったら「頼藤先生も命知らずですね」と連帯の挨拶を送ろうと思っていたら、不意の訃報に接した。

亡くなったあと先生の書いた本を読んで、先生が「認識の鬼」を標榜していたことを知った。「認識の鬼」とは、認識の手段として、自分の知性以外の何も信じない人のことである。自分の知性がただしく知的に機能していないときにも、(ポンコツ自動車のドライバーが、故障箇所を修理しながら走り続けるように)自分の知性の機能不全を勘定に入れて思考し続け、決して「ほかの乗り物」に乗り移ることをしない人のことである。

私はこんな身近に、探し求めていた「ロール・モデル」がいたことを知らなかった。

(文学部教授：仏文学)

『少し早すぎはしませんか？』

早すぎますよ。頼藤先生』

山 本 義 和

私は神戸女学院大学で二度涙を流したことがある。それは、1993年春の「人間科学部新設記念礼拝」と、頼藤先生が亡くなられたことを学生達に伝えた時である。先生が神戸女学院大学人間科学部に赴任されたのは1997年だったので、同僚としてお付き合いの期間は短かった。先生は、とてつもなく博識で頭の回転が速く、お話し上手で気取りのない御人柄の方でした。

直腸癌の手術を受けられたのは昨年6月であった。手術後、大阪警察病院にお見舞いに伺った時は、頭を丸坊主にしておられ、少しばかりのイメージチェンジがあったものの、いつもの「頼藤節」は健在であった。

精神科医の前には外科医であられた先生は、ご自身の病態を的確に把握しておられた。手術前の検査・手術結果・抗癌剤による治療計画、さらには「抗癌剤治療による再発可能性は50%」などと、詳しく、冷静に、ジョークを交えて語っておられた。その日は化学療法が始まった直後だったが、「幸いにして抗癌剤の副作用は今のところでない。抗癌剤とうまくお付き合いができるかもしれない」と話しておられた。私も冗談半分で「白衣でなくてパジャマ姿で見た病院や、患者の気持ちを入院中に仕入れて、よい本を書いてくださいよ」と言って病室を後にした。夏休み明けには大学に復職されて、講義・学生の研究指導・会議など教員としての仕事をパーフェクトにこなされていたので、『完全復帰』と感じていたのは私一人だけではなかったろう。

しかし、夏休み中に抗癌剤の副作用が強く現れたことから、「抗癌剤による延命効果への期待を拒否し、QOL（生命の質）を重視する方針」をご自身の意志で選択しておられた。2月末の大学院入試の面接時に、私達は咳がひどかったので「お互いに風邪をこじらせてはいけませんな」と理学館のトイレで、大阪弁で言葉を交わしたのがお別れになってしまった。この時には肺に癌が転移していたのである。

弔間にご自宅へお伺いした時、御夫人からこの1ヶ月間のことを詳しくお聞きし、涙を抑えることができなかった。先生は最後までご自宅で家族の方と過ごす時間を大切にされ、執筆活動も続けておられた。死亡通知も日付けだけを入れればよい状態に自分で仕上げておられた。ご自身の病態についても医師として十二分の配慮をしておられ、死期が近づいた時に救急車を呼ぶタイミング、またその時に担当するであろう医師に向けての留意事項、延命措置は望まないこと、などを文書で残しておられた。あまりにも出来すぎた人だった。

先生の遺作になった「わたし、ガンです ある精神科医の耐病記（文春新書）」の中で「どうせ人間一度は死なねばならない。筆者は何事も早く済ませるのが好き」と書かれている。頼藤先生にとってこの53年間は、質の高い人生だったことは確かである。しかし、しかしですよ「あまりに早すぎますよ！ 頼藤先生」。黙祷。

（人間科学部教授：環境科学）

『女と男』

女と男のディスコミュニケーション

三浦 欽也

情報科学などという胡散臭いものを生業にしているせいか、私には、女と男の関係も含め、全ての「関係」を情報の流れ、すなわち、広い意味でのコミュニケーションとして捉えようとする傾向があるようだ。「男と女の間には、暗くて深い川がある」と始まる古い歌があったと記憶しているが、これも、「男と女の間」のコミュニケーションの断絶を表わしていると考えられる。女と男の間に引き起こされる様々な摩擦は、ほとんどがコミュニケーションの不調によるものと捉えることができよう。

例えばちょっとした言い争い。これは一般的には、双方の考え方の相違によって引き起こされると考えられがちであるが、実際のところ、会話のマナーの相違の方が、要因としては大きいと思われる。一般に男性は、情報や意図を伝達するために会話をすることが多い。情報の流れは一方的で、情報を共有するというよりは自分の考えを主張する方に力点が置かれる。主張すべきことがない場合は話もしない。一方、女性にとっては、（私の見るところ）会話をする事自体に意味があり、情報を共有することによって相互の連帯感を深めようとしているようだ。情報の流れは双方向的で、伝える内容よりも、伝えるという行為や情報を共有するという状況を重要視しているように見える。これだけ異なれば、言い争いは半ば必然である。（男女間の）言い争いで、「会話の内容」よりも「言い方」や「相手の態度」などが頻繁に問題とされることは、これを裏付けているように思われる。

また男性は、多くの場合、親愛の情を表わすのに、言葉ではなく、肉体的な接触や共に飲食するなどの非言語的手段を用いるようだ。だが、これらの手段がよく機能するのは、同性間やある程度親しい異性間に限られる。いわゆるセクシュアルハラスメントの一部は、これらの手段を「あまり親しくない異性」に対して無理矢理適用することによっても引き起こされているように思われる。

結局女と男は、同じ「言葉」を話しているようでも、実は異なる「言葉」を使っている、互いにBarbaroiであると考えた方がうまくいくのかもしれない。（人間科学部助教授：情報科学）

2011年度女性学インスティテュート編集委員

川合真一郎、小松秀雄、丸島令子（委員長）、三浦欽也、
難波江和英（ABC 順） 編集事務：豊福裕子

編集・発行：神戸学院大学女性学インスティテュート

☎662-8505 西宮市岡田山4-1 ☎(0798)51-8545

E-mail: gender@mail.kobe-c.ac.jp

URL <http://www.kobe-c.ac.jp/gender/>